

3) DMP患児の運動、機能訓練負荷に関する研究 — 心機能との関連において —

愛媛大学 徳島大学
野島元雄 松家 豊

現在、各収容施設において、展開されているDMPに対する機能訓練に関しては、従来より愛護的にかつ合理的に実施する必要があることを強調してきた。加えて、近時、本症における早期よりの心筋の線維化の進展が明らかとなり訓練はさらに一層慎重に重施すべき必要がある。

私共は、従来より上記問題、すなわち、機能訓練の負荷量と心に与える影響に関し、徳島大、愛媛大小児科循環器研究グループと協力して心機能の面から心機図により検討を加えてきた。本年度の検討結果の概要は以下のようである。

障害度の軽度ないし中等度のもの(Stage 2~6)種々10例に対して、5分間のエルゴメーターテストを負荷し、その際の心動状態変化を心拍数、拍出量(一回並びに分時量、体的に心機図により算定)、Heather氏指数を指標として検討した。その結果、安静時の1.5~2倍の酸素消費量を必要とする運動に対して、心拍数の増加ともない、一回及び分時拍出量が増加し、負荷に十分対応できるもの、心拍数の増加にもかかわらず拍出量が減少し、一応明らかに負担となると考えられるもの、心拍数の増加と共に、一回拍出量は減少するが分時拍出量は増加し、心予備力の発揮により負荷が許容されると考えられるものなどをみとめた。また、以上3つの心機能の変化は、障害度と関係なく種々みとめられることも解った。

また既に、DMP患児の運動時の酸素消費量に関して、私共は、歩行(独立)、装具歩行、車椅子操作につき、10分間の連続的負荷により、その酸素消費量は、安静時の2~3倍に達することを明らかにした。このような観点から、上述、心機能の変化を眺めると、連続的な歩行あるいは車椅子操作訓練は心に対して負担となる場合も少なくないと考えられる。上述、心機図などによる心機能の病態、とくに動的な病態の把握が各症例について必要なことと考えるが、現時点ではやや複雑な検査に属し日常茶飯事とはいえない。

然し、本症患児の歩容、とくに動揺性の著明なもの、あるいは装具歩行者の歩容を観察すると「一步一步休みながら歩行する」ことが認められ、連続的とはいえない。この点並びに私共の提唱せる「間欠的」「適度の休息をはきみ休み休みしながらの訓練」は従来よりの主張に対し、一応当をえたものであると考えられる。

↓ **検索用テキスト** OCR(光学的文字認識)ソフト使用 ↓
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

現在、各収容施設において、展開されている DMP に対する機能訓練に関しては、従来より愛護的にかつ合理的に実施する必要があることを強調してきた。加えて、近時、本症における早期よりの心筋の線維化の進展が明らかとなり訓練はさらに一層慎重に重施すべき必要がある。